OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.10
2008年6月

発　行　大阪大学山岳会
〒562－0031　箕面市小野原東4－19－45
大野義照方

山岳部長退任に当たって

会長　大野　義照

定年退官された故山田朝治先生の後を引き継いで1990年4月から18年間務めた山岳部長の仕事を3月末の大学定年退職に伴い退任致しました。在任中、OB諸氏から現役山岳部に対して経済的また人的に多大なご援助をいただいたことに厚く御礼を申し上げます。

この18年間の山岳部を振り返ると、91年には一挙に10名近くが入部、部員数は2けたになり、それまでの減少傾向が止まりました。その後数年間は活発な活動ができました。92年には現役2名がヒマラヤのアイランドピーク（標高6、189㍍、ローツェの支稜上にある）に登頂しています。

一方、93年11月には2年部員の飯田真宏君が剱岳の稜線から滑落し、亡くなりました。大きな事故にはいくつかの原因が重なるものですが、原因の一つに山岳部の伝統あるいは技術がうまく伝わっていなかったことが挙げられます。部員数が大きく変動したり、特に、減少したりすると、技術が継承されません。この事故の後、OB諸氏に現役合宿や山行に参加していただき、登山技術や山での生活技術を一から指導してもらいました。

95年には兵庫県南部地震（阪神大震災）が発生し、阪神間に大きな被害が出ました。現役部員で被災した者はいませんでしたが、OBの方々が被災され、部員には倒壊家屋の整理や片付けに出動してもらいました。

96年冬の北アルプスは大雪に見舞われ、62年に建設された白馬山麓の山小屋、栂の木寮が神ノ田圃側からの雪の横圧で傾いてしまいました。存続をめざして関係者に努力していただきましたが、補修・補強にも解体・新築にも多額の費用を要し、また利用者が激減していたこともあり、99年秋、解体撤去されました。

栂の木寮は山岳部、ワンダーフォーゲル部、スキー部の協力によって建設され、建設時の事情は50周年記念誌「後立山からヒマラヤへ」に報告されています。63年に山岳部に入った私たちの時から、新人部員の冬山合宿はこの小屋をベースに天狗原にテントを張ったり、乗鞍岳で雪上訓練をしたりしたものです。卒業してからは春や5月の連休によく遊びに行きました。夏には山岳会の集会にも利用されていました。

80年代になって登山の形態も大きく変わりました。岩登りもフリークライミングの時代になり、現役部員の間で大学キャンパス内にフリークライミング用人工壁の設置を求める要望が出たこともありました。

90年代後半からは入部者は毎年1、2名と減りましたが、そんな中で女子学生の入部が続き、2年続きで女性リーダーが誕生しました。今も部員は少なく、困難な時期が続いています。ただ、希望があるのは、山岳部に関心のある学生はそれなりにいることです。また、入部しても部員が少なく、山行の幅が狭くなることで辞めていく場合もあるのです。これはOBの山行への参加によって、ある程度は解決できると思います。

今年3月、現役山岳部の面倒をよく見てくれていた越智栄次郎君（83年卒）が奈良県の岩場でフリークライミング中に転落死しました。山岳部にとっても無くてはならない人を失いました。心からご冥福を祈ります。

大学に奉職して39年間、一歩一歩教育・研究を進めてきました。頂上はまだ先の先ですが、小さい頂はいくつか越えることができました。こ

れもみな山岳部で教えられたことで、改めて山岳部に感謝いたします。

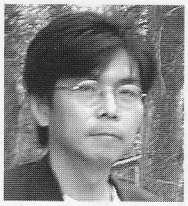
後任の山岳部長には山岳部OBの森藤正人氏に就任していただきました。これまで以上のご支援をお願い申し上げます。

厳しさより安全を 山岳部長を引き継いで

森藤　正人

大野会長の後任として4月から山岳部長を務めることになりました。

学生の時は基礎工学部物性物理工学科に所属し、固体理論の研究をしていましたが、縁あって工学部の電子工学科に職を得ました。その後、組織変更に伴って、今は「大学院工学研究科 電気電子情報工学専攻 量子電子デバイス工学部門」という、やたらに長い名称（正式にはまだ続くのですが）のところで助教を務めています。研究テーマはエレクトロニクスの理論で、トランジスタやレーザーなどの電子回路を構成する部品の動作を解析したり、新たな素子の特性を計算したりする仕事をしています。



山岳部は長らくの部員不足で、4月末現在、部員3名で、全員が4年生という危なげな状態です。大学院生の頃は監督をしていましたので、多くの部員と接してきて、山岳部が活発だった時もそうでない時も見てきました。部員が少ないことはこれまで何度もあり、そのつど、何とか切り抜けてきましたが、今回はかなり危機的なようで、どうなることかと案じています。

長らく山岳部と離れていたのですが、このような形で山岳部の活動にかかわることになり、これから、若いOBの協力も得て、現役部員の活動をバックアップできるように努力していこうと考えています。若い人と接するのは楽しいし、教えられることも多くあると思います。僕としては現役部員たちが昔のようにハードな（たとえば厳冬期の北アルプスへ行くような）登山はしなくてもよいので、安全に気を配りながら、自由に活動できる部であれば、と考えています。

自分自身、近年は山とは無縁の生活をしており、近ごろの山登りやクライミングの事情にも疎くなってしまいました。運動といっても家の周りの坂道を歩くことぐらいしかしておらず、何かしなくちゃと思っていたので、これを機会に自分も運動を始めようかと考えています。

（1985年基礎工学部卒）

P29遠征の苦労話も 夏の白馬集会

2007年度の夏の白馬集会は9月1日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」（丸山徹也館主）で開かれ、13人が参加した。

初日は夕食のあと、別棟の「與兵衛倶楽部」へ。丸山庄司前館主を囲んで歓談に移り、半世紀前、対岳館に1カ月余りも泊まり込んで農作業を手伝った話（兼清氏）や、ネパール語辞典編さんの裏話（三枝さん）、P29遠征の苦労話などが続いた。

2日目は八方尾根散策など自由行動。3日目は恒例の懇親ゴルフ大会が長野市の川中島カントリークラブであった。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽田島汎▽川島勇▽山本光二▽三枝礼子▽木村裕一▽関本靖裕▽宍戸元▽兼清喜雄▽前澤祐一▽高田邦雄▽山田靖則▽田中喜樹

大野氏が部長退任あいさつ OUMC新年会

本会の2008年新年会は1月20日夕、大阪市北区の阪大中之島センター（旧歯学部跡）で開かれ、現役部員1人を含む16人が出席した。

久しぶりに出席した広瀬貞雄、大川和秋両氏から近況紹介、現役側から山岳部の現状について報告があったあと、3月末で阪大を定年退職する大野会長から、山岳部長退任のあいさつと、後任に元山岳部監督の森藤正人氏（85年基礎工卒、助教）が就任するとの発表があった。

出席者は次のみなさん。（会長以外は卒業年次順）

大野義照▽田島汎▽山本光二▽三枝礼子▽杢中勝▽関本靖裕▽岡田博司▽四方大中▽広瀬貞雄▽五百蔵弘典▽山本彰三▽大川和秋▽高田邦雄▽黒田治朗▽山田靖則▽三十尾誠（現役）

東京支部だより

季節外れの新年会

OUMC東京支部の2008年新年会は4月25日夕、東京都千代田区の千鳥ヶ淵近くのトヨタ九段ビル内、トヨタクラブで開催され、会員16名が参加した。

山に行っている人、全く行けない人など、参加者の近況報告のあと、石原氏から中国雲南省調査行の説明、大島氏から関西学院大現役部員2名によるヒマラヤ未踏峰ディンジュンリ（6196㍍）登頂の新聞記事紹介などがあり、盛況だった。前澤支部長からは欠席者の近況報告や住所、メールアドレス変更の連絡順守、8月の白馬集会への参加要請があった。

参加者は次のみなさん。（卒業年次順）

大島輝夫▽宮本貞雄▽山本信樹▽米林外茂男▽兼清喜雄▽野田憲一郎▽村井忠雄▽保母武彦▽米沢成二▽前澤祐一▽横尾秀次郎▽出雲路敬孝▽加藤佑二▽細川明彦▽石原敏雄▽井上太一

45年ぶりに冬山登頂

年末の八ヶ岳・赤岳

前澤　祐一

昨年12月半ば、東京支部恒例となった年末登山の案内が出雲路氏から届いた。年末のこととて、皆さん忙しく、結局、参加者は出雲路、石原、前澤の3人となる。

12月29日　JR町田駅に8時30分集合。石原氏の四駆車で中央道経由、美濃戸口の赤岳山荘に12時30分到着。高度は既に1、700㍍ある。北沢沿いにトレースをたどり、15時20分、赤岳鉱泉小屋着。小屋横の広場に人工の氷瀑（高さ、幅とも約10㍍）が造られ、アイスクライムの練習をするグループもある。小屋は暖房が行き届き、食事も上等で、快適。年末ではあるが、すいていた。

12月30日　6時45分出発。強い低気圧の通過後で、天気はあまり良くないが、行けるところまで行くことにした。8時、行者小屋通過、文三郎尾根を登る。稜線に出ると風が強い。鎖場、鉄梯子が連続するが、締まった雪に覆われ、トレースもはっきりしていて登りやすい。天候が良くないにもかかわらず、数パーティーが頂上を目指して前後にいる。

10時、赤岳山頂（2、899㍍）。風雪で展望は全くない。眼鏡に雪が付いて見にくい。学校卒業以来45年ぶりに冬の3千㍍級の登頂を果たせたものの、顔が冷たくて、ゆっくりする気分にならない。硫黄岳への縦走はあきらめて（そのファイトもない）、元来た道を下る。正午、鉱泉小屋帰着。小屋はだいぶん混んできた。

12月31日　天気が良ければ硫黄岳に登る予定だったが、上空に強い寒気が流入して天候悪化。あきらめる。8時、下山開始。9時30分、駐車場着。

道路は入山時と様変わりし、完全凍結の上に新雪が積もっている。下り始めてすぐにスリップし、脱輪。JAFに救援を要請。結局、4時間半待って救援を受ける。待っている間に、道路の向こう側の斜面をキツネが歩いているのを見つけたのが収穫だった。

（1962年工学部卒）

熊野―高野山を偵察

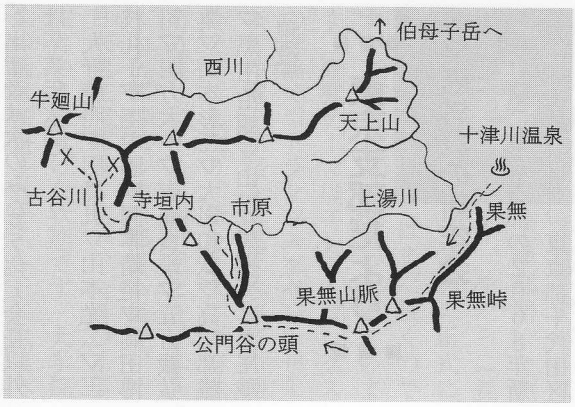
「果無」の名に惹かれ

横尾　秀次郎

高校生の頃、大峰山の奥駆け道を歩いて以来、吉野・熊野に不思議な魅力を感じてきた。熊野古道が世界遺産になって少し腰が引けたが、登山として面白そうなルートを色々調べた。複雑に入り組んだ深い渓谷に分断されているうえ、林道、車道が延び、大峰山脈に匹敵する山岳コー

スはなさそうである。ただ、熊野古道のうち、高野山―本宮（小辺路、こへじ）は伯母子岳（おばこだけ、標高1、344㍍）を越えて行くコースで、登山としても面白そうだ。後半は果無峠を越えて谷筋を歩くだけだが、「果無山脈」という名前に惹かれ、これを越え、対岸の牛廻山（うしまわしやま、1、206・8㍍）から長い尾根を真東にたどって西中に達し、ここから小辺路の三浦峠―伯母子岳を越え、高野山までという4日行程の計画を作った。

このうち果無山脈から牛廻山を経て西中に至るコースは記録はなさそうである。今回は偵察を兼ねて前半部分を踏査した。牛廻山寸前で時間切れとなったが、再度挑戦したい。



【メンバー】前澤祐一、大川和秋、横尾秀次郎

【期間】2007年11月4日～6日

4日　朝5時、横浜を車で出発。近鉄八木駅で京都から来る大川と落ち合い、昼食。五条から十津川街道に入り、15時30分、十津川温泉着。偵察のため西中まで車で往復した。牛廻山方面から西中への道はありそうだ。民宿松乃家泊。

5日　4時45分出発。柳本（150㍍）から尾根を登り、3軒程度の家がある果無集落（380㍍）を経て8時前に果無峠（1、050㍍）に着く。ここまでが熊野古道の小辺路の一部である。ここで古道と別れ、西へ主稜線を登る。石地力山（1139・5㍍）から前方の果無山脈が見渡せる。稜線はあまり起伏がなく、北側が背の低い紅葉した雑木林で覆われ、南側が檜の威圧的な針葉樹林になっている。道は、厚い落葉に覆われ、おぼろげになってきた。ブナノ平（1、080㍍）、ミョウガタワ（1、100㍍）を経て筑前タワ（1、050㍍）に達した。このあたりから北側の尾根筋に下る道があるはずだが、見当たらない。鹿よけの金網の柵に開閉できる部分があり、そこを開けて入ると道が続き、目指す尾根筋に出た。

果無山脈から見た高野山方面

荷物運搬用レールに沿って下るが、急勾配になったので、右の踏跡へ。しばらく東にトラバースし、あとは、わずかに踏跡の認められる暗い植林の急勾配をやみくもに下る。下りきると、舗装された林道に。やがて市原集落に出たが、かなり東へ寄りすぎたようだ。ここから上湯川の右岸に沿って上流に進み、16時半、小さな沢の合流する台地（250㍍）をキャンプ地と決めた。各自、持参のツエルトなどで一夜を明かしたが、雨が降り出し、夜明けまで続いた。

6日　雨はやみ、6時15分出発。吊り橋を渡ると、すぐ大桧曽集落に出る。車道を寺垣内（てらがいと）に達し、牛廻山へ向かう尾根（南尾根と仮称）への道を探したが、見つからない。古谷川出合まで行き、谷沿いの道を進んだが、荒れて廃道になっている。仕方なく出合まで戻り、南尾根に登る、かすかな踏跡を辿ると、左寄りにかなり明瞭な道が続いている。鹿よけ柵を何度か抜け、上へ上へと登ると、南尾根主稜線上の明瞭な道に出た。牛廻山からのコルを目指すが、道が次第に草深くなり、トラバース道が崩落している。

下を大きく回り込めば越えられそうだが、12時30分、時間切れで引き返すことに決める。16時30分、大桧曽まで戻り、公衆電話で民宿松乃家へ迎えの車を頼み、18時、松乃家着。今回の山行を終えた。

◇

翌日は熊野本宮大社と玉置神社に参り、奈良県田原本町にある同期の桑原昭夫宅へ。やはり同期の高田邦雄も参加して大変なもてなしを受けた。8日は大神（おおみわ）神社、箸墓古墳などを巡り、横浜へ帰る。

［付記］熊野古道を除いて、林業に必要な道のほかは廃道に近いと考えたほうがよさそうである。この2日間、2頭の鹿以外には誰にも会わなかった。今年もう一度、このルートを辿り、西中に至り、高野山まで行くべく計画している。同行者を募ります。（1964年工学部卒）

会則が改定されました

昨年７月の総会で会則改定が承認されました。新旧会則の対比表は以下のとおりです。下線部が変更および新設の箇所を示します。本表に記載されていないものについては変更はありません。

	旧会則（昭和60年12月4日制定）	改定後	改定主旨
第１条	本会は、大阪大学山岳会という。	本会は、大阪大学山岳会と称す。	一般的表現にあわせた。
第２条	本会は、事務所を大阪市東淀川区西淡路 1-13-1 徳永病院に置く。	本会の事務所は会長の定めるところに置く。	固定した事務所がないため、会長の勤務先等、会長が定めるものとした。（会報 OUMC に記載する）
第３条	本会は、登山を通じて会員相互の親睦を図り、・・・・	本会は、登山活動を通じて会員相互の親睦を図り、・・・・	登山を広く解釈できるよう「活動」を追加。
第５条	本会の会員は次の２種とする。 （1）　正員 大阪大学体育会山岳部に所属した者、および本会の目的に賛同する者で理事会において入会を承認された者 （2）　名誉会長 会長、部長経験者 （3）　名誉会員 本会に功労があった者、又は学識経験者で総会において推薦された者	本会の会員は次の４種とする。 （1）正会員 山岳部に所属した者、もしくは本会の目的に賛同する者で理事会において入会を承認された者 （2）学生会員 山岳部に所属する学生、および大学院生 （3）特別会員 大阪大学の前身である旧制大学等の山岳部の出身者で、理事会において入会を承認された者 （4）名誉会員 本会に功労があった者で、理事会において推薦され、総会において承認された者	現在の会員の実態に合わせた。 （1）山岳部に所属した者と理事会の承認者とが and に解釈できるものを or に変更。 （2）学生会員の規定を設け、山岳会と山岳部の一体化をはかる。（山岳部が大学の認定団体でなくなった場合にも学生・院生の活動の場を保証する。また、第７条の規定と合わせ、卒業していない学生は山岳部の定めにかかわらず、学生会員として扱われる。） （3）特別会員を定め、その定義を明らかにした。 （4）名誉会員の定義を変更し、承認手続きを明確にした。 名誉会長については該当者がなく、会長、山岳部長経験者は名誉会員とされているので、削除した。
第７条	正会員になろうとする者は、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を得なければならない。	正会員になろうとする者は、入会申込書を会長に提出し理事会の承認を得なければならない。ただし、学生会員は卒業もしくは課程修了をもって正会員とする。	学生会員の入会について定めた。（これにより、第５条（1）の正会員は、理事会での承認者以外は、大阪大学の卒業者となる）

第８条	会員は退会しようとするときは、会長に届け出なければならない。会員が死亡したときは退会したものとみなす。	会員は退会しようとするときは、会長に届け出なければならない。会員が死亡したときは退会したものとみなす。ただし、学生会員は山岳部の退部をもって退会したものとみなす。	学生会員の退会について定めた。
第９条	会員であって、本会の名誉をき損し又はその設立の趣旨に反する行為をしたときは、総会において出席者の４分の３以上の議決により、これを除名することができる。	会員であって、本会の名誉をき損し又はその設立の趣旨に反する行為をしたときは、総会の議決により、これを除名することができる。	総会成立の規定がないため、出席者の３／４以上という根拠があいまいなので、総会の議決によるとした。（郵送による議決権行使手続き等を理事会で決定する）
第11条	３．理事は互選により常務理事若干名を定める。	３．理事は互選により常務理事若干名および担当業務を定める。	理事の担当業務について定めた。（現在、事務局、会計、東京支部長、会報担当が決まっている）
第17条	総会は、この会則に定めるもののほか、次の事項を決議する。 (1)　事業計画の決定 (2)　事業報告の承認	総会は、この会則に定めるもののほか、次の事項を決議する。 (1) 事業計画および予算の決定 (2) 事業報告および決算の承認	現在、総会において承認されている予算、決算について明文化した。
第26条	本会の会計年度は毎年９月１日に始まり、翌年８月３１日に終わる。	本会の会計年度は毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。	通常の会計年度に合わせた。（現在、総会はほぼ６月に行われているので、改定後のほうが妥当である）
第28条		本会の解散は理事会の発議により、会員の３分の２以上の賛成をもって行うものとする。	本会の解散に関し明文化した。
第29条		（条番号の送り）	第28条新設による条番号の送り。
第８章 付則 第30条	(1)　年会費　5,000円 (2)　会費免除会員75歳以上 （条文はない）	会費は通常会費と特別会費とし、正会員の通常会費は総会で定める。 ２．特別会費の徴収は、理事会においてその必要性および金額と納入方法を議決したのち、総会の議決により行う。 ３．名誉会員、特別会員および学生会員の会費は免除する。	通常会費の額および特別会費に関し条を立てて明文化した。また、会費の免除者について明らかにした。（現在、75歳以上の正会員からも会費を徴収している。会員数の先細りの中、正会員に会費免除者を定めるのには会の会計上問題がある）

7年がかりで百名山踏破 定年後のチャレンジ

山本　信樹

日産自動車に入社した1960年夏、P29峰への遠征話が持ち上がった。まだ実習中の身だったが、「参加したい」と、篠軍（篠田軍治先生）に申し出た。同期入社の友人たちの応援もあって年末から翌年の夏休みまで休職して第1次隊に参加した。出発前に先輩に連れられて日本山岳会の槙有恒氏に挨拶に行った際、「帰ってきても山登りを続けてくださいね」と優しく言われたのが今も耳に残っている。遠征に出た先輩サラリーマンの多くが、その後、山に行かなくなったからだろうと思った。しかし、帰国後、社内ですっかり有名人になってしまったし、製造現場で仕事をする者として会社に世話になっている間は一切山に行くまいと心に決めた。

遅ればせながら槙氏の励ましに応える気になったのは、それから40年が経ち、定年後の長い時間をどうするか考えてからだ。企業人としてはまだまだ不完全燃焼。何か社会に貢献できる仕事がしたいという思いが強かったが、折からの「ゴーン旋風」の中、どこからもお呼びはなかった。

そこで、現役の時に出来なかったことを思う存分やって欲求不満をなだめながら次のことを考えることにした。まず3つの目標を立てた。

第1は「百名山」の登山。第2はゴルフの公式ハンディのシングル達成。第3はスペインのバルセロナに単身赴任している時に始めた帆船模型の完成だった。

百名山のうち学生時代に登ったのは25山ほどだった。意識して登り始めたのは62歳の誕生日を目前にした2000年1月9日の丹沢山からで、関東地区の山から順に登った。近くの場合は、土曜日の早朝、単身赴任宿のアパートから車で登山口へ行き、登り終えると、次の山の麓に移動。民宿や山小屋に泊まって、翌日また登って戻るというパターンが普通になった。目標が遠くになるにつれて、前夜に登山口近くに宿を取って翌日から登るようになった。

完全にリタイヤしてからは鎌倉の自宅に戻ったが、生活リズムを維持することを主目的に4日目ごとに当番が来るシルバー人材センターのアルバイトをするようになった。すなわち自由時間が連続3日しか取れないのである。したがって、遠い山へは、仕事が終わるとすぐ飛び出し、夜遅く麓の宿に到着。翌朝から登り始め、3日目の夕方に戻るというパターンだ。これで東北のほとんどをこなした。

2002年9月21日、塩見岳にて

登り方の原則はいくつかあるが、ほとんどが車での移動なので、登山口に戻るルートを選ばざるを得ない。可能な場合に限って周回ルートを選択した。車で行ける範囲の山は、行動中に悪天候にならないと確信できる時にしか決行しない。天気予報を確認してから出発を決めるので、単独登山が多くなった。単独行の危険は重々承知しているつもりなので、人の多い一般道を週末に行くことをいとわないようにした。最近は道路が整備され、車で行ったのでは登山のうちに入らないような山が多いが、それにも目をつぶった。しかし、登山という基準から見ると、伊吹山、筑波山、乗鞍岳、霧が峰、美ヶ原などは魅力が薄い。

雪山には基本的に行かなかった。したがって行動期間は4月頃から11月上旬までだった。だが、残雪や新雪に出くわすにつれ、アイゼンやピッケルも買い揃えて、リスクのある時は持って行くようにした。学生時代に使っていた道具は第4次P29遠征の際、山岳会から要請を受け、親父の欧州土産のベントのピッケルまで寄付してしまっていたからだ。

稼ぎはほとんどなく、遊んでばかりいるので、懐はいつも空っぽだ。飛行機代がかさむ北海道や九州へは片道1万円という、2カ月前に売り出す特割切符を活用した。これで日取りが決まってしまうので、天気は運任せである。雨中の登山で記憶にあるのは羊蹄山、阿寒岳、開聞岳、霧島山、祖母山などである。飛行機、新幹線の次はレンタカーに乗り継ぎ、1回に2、3山

を梯子する旅を月2、3回繰り返し、年に15山くらいを消化していった。

登る順序は、南アルプス、朝日岳、飯豊山、トムラウシなど重たい山はなるべく早く、元気なうちに終わっておきたいと考えた。北海道は弟と、南ア、朝日岳、飯豊山、月山、鳥海山などは従弟と、甲武信岳、瑞牆山、金峰山は野田君と、白馬岳、宮之浦岳、黒部五郎岳などは米林君と一緒だった。それ以外はほとんど単独だった。

百名山完登とはいっても、頂上を踏んでいない山がいくつかある。すべて火山で、百名山の半分近くが火山ではないだろうか。焼岳、浅間山は頂上が立ち入り禁止、富士山はお鉢の上まで行ったが、測候所のある頂上は通っていない。羊蹄山は、濃いガスの中で「頂上」と書かれた赤い三角印のついた標識を頂上と思い込んで下山した。地図を見ればすぐ分かったはずだが、雨と寒さで省略したためだ。後で写真と地図をつき合わせた結果、頂上の方向を示す標識と知った。

遭難のリスクについては、ほとんどの場合、一般路を選んだので、道を間違えたり、迷って危ない思いをしたりしたことはなかった。だが、残雪が多い時に、夏道を示す目印のテープの間隔が長く、次の目印を探すのに苦労したことはあった。年を取るにつれて反射神経と運動能力が低下するので、下山中の転倒には最も気をつけるよう心がけた。これには2本ストックが効果があるように思う。

登山の時はいつも高度計を持って行く。ここ数年、登高速度は大体1時間300㍍である。登り始めると30分おきぐらいに高度をチェックし、このペースに近い時は「調子が良い、今日も大丈夫だ」と思いながら登る。昔、剱沢の合宿で雪渓を1時間500～550㍍のペースで登れたのが懐かしい。高度が2000㍍を超えたり、腹が減ってきたりするとペースが落ちる。歩きながら小刻みにエネルギーを補給するのがスタミナを維持するコツだ。高度計のもう一つの利点は、等高線が決まり、地図上の現在位置を確認するのに便利なことだ。

これを読まれた方で通信関係の仕事をされている方にお願いがある。緊急時の連絡用に私は携帯電話を必ず持参するようにしているが、本当に連絡が必要な時はたいてい電波の届かない所にいるものだ。衛星中継の電話機は嵩が大きくて重く高価だ。また無線免許は取得が面倒である。小型の衛星電話のレンタルサービスを開発すれば遭難者の救出に大きく貢献すると確信する。

2006年8月6日の黒部五郎岳を最後に百名山は一応登り終えたわけだが、振り返ると、深田久弥氏が選んだのは、単独のピークではなく山塊だったのではないか、そして、これまでの登り方は山に失礼だったのではないかと感じている。そこで、昨年からは山塊の縦走を主体に、山を味わい直す登り方にシフトしながら、アルバムのページが埋まっていない学生時代に登った山も登り直したいと思っている。

（1960年工学部卒）

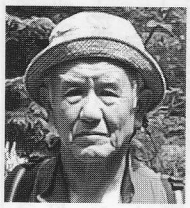
ヴィア・フェラータ ドロミテで見た岩場ハイク

鷺沢 忍

昨年夏、イタリアのドロミテに9日ほど滞在した。

・初めての地なので、まず概念をつかもうと、移動しながら1日ハイクを続けた。

・ネットでの山小屋の予約が困難なので、麓のホテルと山ホテルに泊まる。



・唯一の公共交通であるバスは本数が少なく、各社の連絡も悪いので、ミュンヘンでレンタカーを借り、オーストリー・チロル経由で入る。

ネット旅行記の先輩で、ドロミテのベテランであるKさんが、ある時、「スイスは見る山　オーストリー・チロルは歩く山　ドロミテは手で触れる山」と言われた。ロッククライミングのメッカ、ドロミテの特徴を簡潔に捉えた表現だ。そして、岩壁や鋭い稜線の登攀から連想して「クライマーだけの世界」と思っていたら、小学生までが楽しめるスポーツの領域もあることを初めて知った。

それはヴィア・フェラータ。岩場に張られたワイヤーケーブルや鉄線に自分の身に着けたロープの先のカラビナを掛けて安全に登攀できるようにしたルートで、初級コースなら私にもできそうな岩場のハイキングだ。その概要を紹介しよう。ただ、自分で体験したわけでなく、コースを眺めただけの知識なので、誤解も多いと思うが、ご容赦ください。

［歴史］

イタリア語でVia Ferrate（鉄の道）、ドイツ語でKlettersteige（登攀路）。鉄製の手すり、ワイヤーロープ、梯

子などが整備された登山ルートのことを言うが、初めから計画されたものではないだけに普通の登山道との区別は難しい。部分的にヴィア・フェラータになっているといったほうが正確だろう。その歴史はスポーツ登山の始まりと同じとされ、19世紀にセーラ山塊西面のペスネッカーパス（現在も上級コースとして知られる）が最初とされる。そして、第一次大戦でドロミテが戦場になった際、兵士の安全のために敷設したフィックスワイヤーと梯子が戦後転用されたのが本格的な登場とされる。

その後、1930年にCAI（イタリアアルペンクラブ）とSAT（トレンティーナアルピニスト会）がルート整備を始め、第二次世界大戦後にネットワークが完成する。その一部がアルタ・ヴィーラ（ハイレベルのトレッキング道、有名なスイスにあるオートルートと同義）と呼ばれ、ドロミテを縦断する、長いのは16日もかかるトレッキングコースが4ルートほどできた。

［道具］

フリークライミングなどの隆盛によってクライミングの用具もザイルの結び方も様変わりして年寄りは戸惑うばかりだ。

http://www.alteria.co.jp/technical/SP/sports_via.htm

に用具と使い方の図解があり、理解しやすい。

ハーネス＝クライミング用のシートハーネスがここでも使われる。それに肩と胸につけるチェストハーネスを加えたフルハーネスが特に年少者に勧められている。

ダブルランヤード＝先端にカラビナをつけた、長さ50～80㌢（腕の長さにほぼ相当する）の主としてナイロンのテープまたはロープ状のもので、もう一方の端はハーネスに固定される。フィックスワイヤーの支柱のところでランヤードを付け替えるために通常は2本で構成される。

オートロッキングカラビナ＝カラビナの着脱が容易な構造で、ヴィア・フェラータのワイヤーに掛けやすい形状のものもある。

エネルギーアブソーバー＝転落時にフィックスロープが支える際、体へのショックを和らげる工夫がランヤードに施されているものもある。

ランヤードの縫い目が裂ける構造やランヤードのハーネスへの結び目に付けるダンパー形のがある。

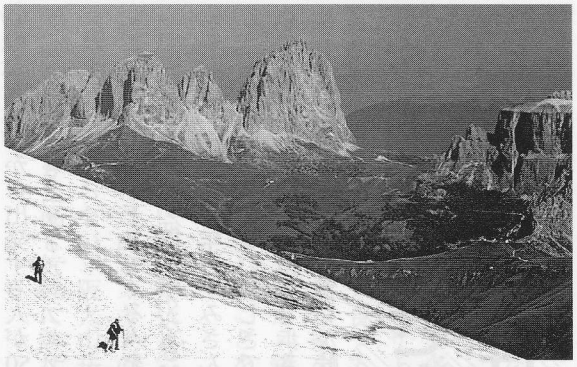
その他＝登攀用ヘルメットの着用が義務付けられている。また革手袋が勧められる。

［ルール］

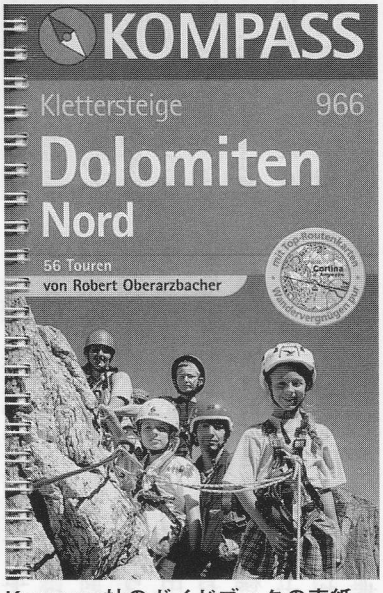
ごく単純だが、エチケットとして、用具なしでコースに挑戦しない▽できるだけ単独行動を避ける▽単独の時は、声が届く範囲に人がいるように心掛ける▽ワイヤーの支柱には1人だけとなるようにする。複数だと転落時に巻き込む恐れがある▽ワイヤーと支柱の安全性と強度をチェックする。保守の保証がない。

［コース］

手元にあるKompass社のガイドブック「Klettersteige Dolomiten Nord」には、ドロミテ北部で56コースが紹介されている。



ドロミテ北部のサッソルンゴ山群。ここにもコースがある



Kompass社のガイドブックの表紙。少年らの装具がよくわかる

それらは初級＝経験の少ないグループのハイキング向き、22コース▽中級＝経験を持つ熟練した登山者向き、27コース▽上級＝長く、非常に難しいコース。絶壁やオーバーハングの登攀技術が必要なこともある。7コースに分類され、それぞれ部分的にヴィア・フェラータがある。

［ヴィア・フェラータに出合ったハイクの1日］

オーストリーからブレンナー峠を越えて西部ドロミテのチブリアーナに着いた翌日、まず偵察をと、ローゼンガルテン山系の西側中腹を横断するハイクに出かける。フロマーアルムに駐車してローゼンガルテン小屋まではリフトで600㍍ほど高度を稼いでもらう。客の大半はヘルメットをかぶり、ハーネスを着けたヴィア・フェラータに行く人たちで、年少者も多い。このサンテナー峠ルートは初級コースで、登り2時間、

下り（1周するので）4時間、うちヴィア・フェラータは1時間。途中で素晴らしい岩塔バヨレットトゥルムを仰ぎ見ることができるので人気のあるコースだ。

前夜同宿だった神戸のご婦人2人は朝早くから、このコースに出かけた。後で聞くと、彼女たちは沢登りや岩登りのベテランらしく、用具なしで難なく歩けたそうだ。

リフト上部でヴィア・フェラータに行く人たちと別れ、山系を横断するヴァヨロン峠への分岐点まで中腹の道を南下する。ガレ場を登ったところにあるヴァヨロン峠は中級のヴィア・フェラータコース「マザーレ・ローダ」のスタート点で、多くのグループが登攀準備をしている。ここでも大勢の年少者がいた。中にはヘルメットなしや、ワイヤーに頼らずコースを外して歩くルール破りもいる。一方、慣れずにもたもたして渋滞を起こしている人もいる。出発点で見る限りではそんなに厳しいようには見えない。このルートは登り4・5時間、下り2時間。うちヴィア・フェラータは3時間。

しばらく見物した後、峠を下り、東面から山系を一周する。途中のロートヴァントヒュッテが先ほどの「マザーレ・ローダ」コースの終点なので、コースを終えて満足感いっぱいの人、これから出発する人が50人ほど憩っている。「ヴィア・フェラータ銀座」だ。

ここでコースを下りてくる人を眺め、自分もますます行きたくなるが、岩登りのブランク50年、かみさん連れ、おまけに用具のない悲しさで諦めてパオリーナ小屋目指して歩き続ける。そこからリフトでカレル峠まで下り、散歩を終わる。

この日のアルバム日記が次のブログに載せてある。ご覧ください。

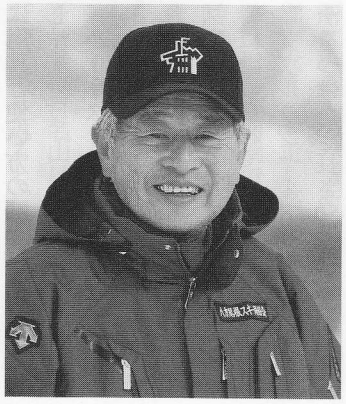
2007年ドロミテの旅（4）ローゼンガルテン・ロートヴァント一周ハイク

http://4travel.jp/traveler/4nobu/album/10190763

丸山庄司さんが叙勲に輝く
「継続は力」認められた

（1956年工学部卒）

白馬村・対岳館の2代目館主で、本会名誉会員の丸山庄司さんが昨年の「秋の叙勲」で旭日双光章を受章した。第一線を退いても、まだまだ元気いっぱいの庄司さんに受章の感想、近況などを書いてもらった。



◇

私は白馬に生まれ育ち、山とスキーに明け暮れた人生であった。そして、この原稿の依頼を受けたことで、私を山のとりこにしたのは、高校1年の時、阪大山岳部の山行きに参加させていただいたのがきっかけであることを改めて思い出した。

父・與兵衛が没して28年、74歳だった。私もその年齢になったが、父の晩年と比べて自分ではまだまだ元気だという意識が強く、実感がわかないのが現実である。しかし、家族の中では「爺さま」扱いで、家では必要のない人間になってしまった。当初は寂しさもあったが、最近は慣れてきた。時代は変わったのだと、年相応の動きをすることにし、女房と野菜作りに励んでいる。長年たずさわったスキー関係の仕事も2年前、（財）全日本スキー連盟専務理事の職を最後に退いた。家業の対岳館は、6年前から息子の徹也にすべてを任せてある。

振り返ると、40年余も家業は女房に委ねてスキー関係のことで家を空け、国内だけでなく、海外へまで足を伸ばした。その遊びの証として昨年の秋、旭日双光章という叙勲の栄に浴することができた。受章理由は「スポーツ振興」。スキーを中心としたスノースポーツの普及発展と自然保護、山岳遭難救助活動などらしい。「中身はなくても継続は力なり？」を認めてくれたというのが私の正直な気持ちで、家族に感謝しつつ、ありがたいことだと思っている。

最初にもふれたが、今から57年も前のこと、阪大山岳部は夏山合宿後の8月中旬、針ノ木谷に集結した。そこから数名のグループに分かれて縦走するというので、高校1年の私も連れて行ってもらうことになった。私たちのコースは黒部川を遡って東沢谷を詰め、裏銀座コースから槍ヶ岳へ、さらに北穂から涸沢経由で上高地へと約1週間の山行きだった。

黒部川では渡渉と高巻きを繰り返した。腰まで浸かるので岩の上を歩いたら、加藤幹太さんに叱られた。「庄司、岩の上でなく川の底を歩け。

滑って転んだらどうする！」。言われてハッと気がついた。東沢谷から水晶小屋跡に着き、登山道に立った時は、家に帰ったような安堵感をおぼえた。縦走路から外れているので、登るチャンスの少ない水晶岳を往復し、鷲羽岳は稜線コースをたどった。

大キレットからは北穂への登りをやめて、急きょ、横尾本谷の草付きの急斜面をいっきに下降し、予定より早く着いた徳沢園でくつろいだ。私はこの山行きで、登山の奥の深さを教えてもらい、山にとりつかれたと今でも思う。

生活の中で、冬はスキー、夏は登山のウエートが高くなった。北アルプス一帯のガイドの資格を取得して山案内をしたり、北アルプス遭難救助隊員として活動したりした。初冬の北鎌尾根で、白馬村の白河隊員が二重遭難で亡くなった時は、鹿島槍の遭難救助に出動していて無線で知るしかなかったことを思い出す。

そんなわけで、このたびの受章理由はスキー活動のウエートが大きいと思うが、山での活動も入っていることを誇りに思っている。

スキーについては、若い時は選手や指導者として国内を飛び回ったが、近年は大会運営や行事への参加、会議が多く、もっぱら「スノースポーツ行政？」に関係することになった。10年有効のパスポートが今年5月で終わるので数えてみたら、30回も海外に飛び出していた。国内の冬はあちこちのスキー場へ、シーズン外になると、月に4、5回は会議で東京日帰りの生活が続いた。よくもまあ飛び歩いたものだと、自分でも感心している。引退してからは2年間で東京に5回行っただけ。今は行くのが億劫になってしまった。

徹也は、この冬から対岳館の近くに流行の立ち飲みバーを開店した。名前は「與兵衛倶楽部」と名付けてくれた。店内には親父の古い写真や山の道具などを展示して、細野の歴史を知ってもらうようにしている。また、今年1月にロードショウ公開されたスキー映画「銀色のシーズン」は白馬村が撮影地になり、雄大な白馬連峰や八方尾根が映し出された。対岳館も旅館「はなみずき」の名前で出演？している。プロデュサーと徹也が以前から親しく付き合っていたこともあり、撮影には我が家をあげて協力した。その昔、父が「銀嶺の果て」の撮影に関係したことを思い出しながら。

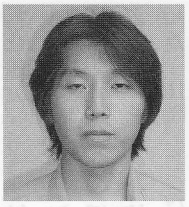
対岳館も3代目に世代交代したが、親父から受け継いだ山とスキーの友への友情は変わらない。阪大山岳会関係の皆さんも今後も気軽に訪れていただきたい。

大阪大学山岳部活動報告

2007年度

リーダー所感

三十尾　誠



部員減少に歯止めの効かないなか、2007年度の新入生勧誘も難航を極めた。興味を持った者が2名現れたまではよかったが、1名はその後、姿を見せなかった。もう1名は何度か岩登りを体験させたが、親が雪山登山に猛反対し、買いそろえた装備を返品するまでの騒ぎになったあげく去っていった。外部から見た大学山岳部のイメージを顕著に表した出来事だったかもしれない。

結局、例年、「新入生歓迎」と銘打って5月連休に行う合宿は大学院1年生の網野、学部3年生の三十尾、留学生のヘンリーという変わったメンバーで迎えることとなった。白馬岳で実施したこの合宿は、4年間雪山を経験した網野前リーダーに助けられて大過なく終えることができたが、3年生の積雪下での判断能力がいかに心許ないかを痛感させられることにもなった。

夏を迎えると、網野は他大学への進路変更、ヘンリーは留学期間満了によって共に大阪を離れた。結果として残されたのは、部員が3年生1名だけという現実であった。1名では部としての活動などできるはずもなく、夏の間は、習慣だった練習だけを漠然と続けて日を過ごすこととなった。

本来なら偵察山行でもという時期を前にした秋、ようやくもう1名、3年生の参加を得ることができた。しかし、ほとんど経験のない者を連れて、いきなり厳冬期登山に踏み切ることもできず、秋に台高山脈の池木屋山（標高1395・9㍍）と明神岳を登るにとどめた。その後、大阪外国語大学の統合で新設された外国語学部から3年生1名の参加があった。大阪外大山岳部はかなり前に消滅してしまったらしい。

このように部員の絶対数不足が決定的な活動制約要因となっており、かつて現役を支援し、合宿にも同行してくれた若手OB諸氏が関西を離れる傾向もますます強まり、技術の伝承が難

しくなりつつあるのが現状だ。

大学山岳部への入部者が減った背景には、登山を志す大学生の前には社会人山岳会やワンダーフォーゲル部など選択肢がいくつもあることが挙げられるだろう。また、ハードな登山を望む者に応えるには技術伝承が十分でなく、ソフトな登山を望む者の受け皿でも決してないのが大学山岳部の置かれた現状であろう。さらに、部に興味をもって訪れる者がいても毎年1人くらいで、入部すれば同年代の仲間が得られるという本来の魅力が部員減少によって失われ、悪循環に陥った結果、ついにここまで来てしまったとも言えそうだ。

大学山岳部の存在が問われるなかで新入部員を獲得するためには、新入生の希望をしっかり汲み取って、能力に見合った登山を心がけることから始めたいが、登山の安全を守るためには技術的な伝承をおろそかにすることもできない。その両立をいかに図っていくかが今後の課題である。

◆新入生歓迎合宿／白馬岳

【期間】5月1日～4日

【参加者】三十尾（CL）、網野、ヘンリー

1日 夜行バスにて梅田から長野駅に向け出発。

2日 栂池自然園（11・10）―天狗原手前（12・02）―乗鞍岳手前（13・00）―乗鞍岳頂上（13・45）―白馬大池山荘着（14・25）

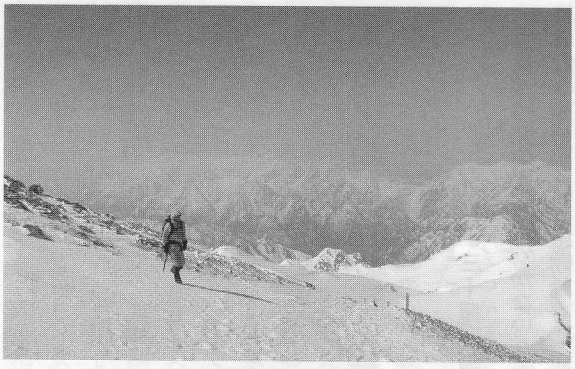
天候は小雨。天狗原の開けた斜面には雪じわ。東側の樹林帯から回り込む。天狗原手前でみぞれになり、風が強い。傾斜は弱く、雪質も悪くないので、歩き自体は快適な部類に入る。乗鞍手前の開けた場所でかなりの強風。顔に固い雪の粒がたたきつけられ、痛くてたまらない。乗鞍頂上ではいくぶん風が落ち着くも、視界が悪く、シルバコンパスを頼りに山荘を目指す。白馬大池山荘は雪に埋もれ、赤い屋根だけがひょっこり顔を出している様子が面白い。山荘脇を掘り下げたテントサイト跡を利用し、雪のブロックを積み足して風防を補強し、幕営。

3日 白馬大池BC（6・05）―小蓮華岳通過（7・37）―白馬岳山頂（8・45）―小蓮華岳（10・17）―白馬大池BC（11・20）

空荷で白馬山頂に向けて出発。荒れ気味だった前日とは打って変わって快晴。風も穏やかで、視界良好。白馬山頂から見ると、大雪庇がそのまま残っており、白馬主稜が登られた形跡はなかった。早く帰れたので、午後から白馬大池南斜面に移動し、翌日行う予定だった雪訓を繰り上げて実施。FIX通過やスタンディングアックスビレイの練習をしたが、強い日差しで雪面がグサグサになり、まったく滑り落ちないため、形だけに終わる。

弱層テストの練習として円柱テストとシャベルテストを試す。円柱テストでは、肘で力をかけたところで、上の層から50㌢ほどのところでスッパリ切れた。シャベルテストは、雪面を叩くたびに、切り出した雪柱がボロボロと崩れて使い物にならなかった。16時、BCに戻る。

4日 白馬大池BC（5・45）―乗鞍岳頂上（6・06）―栂池自然園ゴンドラ駅（7・06）―ロープウェイ栂の森駅（8・00）―白馬駅（10・05）



白馬岳頂上手前で

BCを撤収し、各自、アイゼンを装着したうえで出発。乗鞍頂上を過ぎると、天気が良いせいで、むしろ暑い。網野はアイゼンを外す。自然園ゴンドラ駅を経て、ゴンドラ軌道下の森林斜面を歩いて下りはじめる。足が深く雪に埋もれがちで、途中、ヘンリーのアイゼンが外れて埋もれ、探しに戻る場面もあった。

◇

新入部員がなかったため、雪訓も当初予定ほどの時間を割かず、結果的にコンパクトにまとまった合宿となった。雪上でのルート選択が3年生だけでは十分な判断を下せなかったのは、今後を考えると痛い。入山日には悪天候に阻まれたが、全体的には好天に助けられた合宿であった。白馬大池周辺は広く、雪面から顔を出している岩もほとんどないので、雪訓に適すると思われたが、昼間は日射により深く沈む雪質となるため、雪訓は早朝に行う必要がありそうだ。

◆台高山脈／池木屋山・明神岳縦走

【期間】11月3日～4日

【参加者】三十尾（CL）、上島

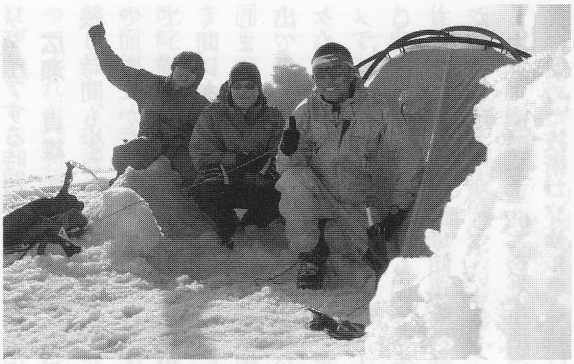
3日 三重県松阪市飯高町、ホテルスメール前（10・30）―登山口（13・00）―幕営地（16・00）

近鉄松阪駅からのバスを終点で降りて歩いていると、宮の谷出合手前で、

通りがかりの車が林道手前の駐車場まで乗せてくれる。林道は地図上で破線の道で、悪路を予想したが、しばらくはならされた歩きやすい道が続く。高滝の右側をまく際、念のためロープを用意したが、出すタイミングはなかった。高滝～猫滝間で幕営。

4日 出発（6・30）―奥の出合（7・30）―池木屋山山頂（9・20）―霧降山山頂（10・10）―千里峰（10・55）―千石山（11・15）―明神岳（14・35）―明神平（14・55）―大又バス停（17・45）

明神岳への登りで上島がバテたことで予定タイムより大きく遅れ、終バスの時刻が危ぶまれる。時間短縮のため、複数ある下山ルートのうち、大又林道を選択し、最速ペースで下山。



白馬大池のテントで

会員の近況

（白馬集会や新年会の出欠はがきから抜粋。その後の変動などは未確認。卒業年次順＝西暦。敬称略）

大島　輝夫（理49）昨年5月に仕事で米国ピッツバーグに行き、理学部化学研究室の先輩で、ピッツバーグ大教授をしておられた塩野良之助様（理45）にお目にかかりました。お元気です。塩野様は甲南山岳部OBで、戦後、日本山岳会関西支部復興にも尽力されました。関集三先生（理38）もお元気です。

加藤　幹太（理52）元気にしておりますが、80歳を迎えて不具合の個所がいくつかあります。山岳会はすっかりご無沙汰していますが、現役が少ないのは何とも残念です。盛り返して下さるよう祈っております。

堺谷　弘（理53）昨年4月21日に東京の芭蕉庵を出発、マウンテンバイクで奥の細道を走りました。30日間のうち20日は野宿の旅でした。また、昨年2月に牛乳酒の特許を出願し、7月から11月にかけて5件の特許を書き上げました。特許を始めて10年になります。

大村　一生（理54）医者通いをしながらも、毎日、元気に過ごしています。今年の目標は薬の量を減らすことです。一度悪くなった所は薬を飲んでも元へは戻らないことを自覚しました。これが寿命ということでしょうか。

関本　靖裕（理56）普段は元気で食欲旺盛！　昨年の新年会、白馬集会と1年があっという間に過ぎた感じです。その間、1カ月は山小屋、3週間はフランス旅行と楽しんだせいかも知れません。これから上海へ気分転換に出かけます。5月にはトルコへ。小生の病気には旅が一番よいようです。

横井　保枝（文56）夫婦とも元気なうちにと、昨年は海外旅行が続きました。3月チベット高原鉄道の旅、5月のエジプト～ヨルダンの旅ではシナイ山に登りました。6月末からのスイストレッキング10日間は前年ほどは天候に恵まれず、残念でしたが、それでもモンブラン、マッターホルン、アイガーは十分に姿を見せてくれました。

鷺沢　忍（工56）毎年夏にスイスへ3～4週行くのですが、今年は5月に北米7国立公園を巡り、7月にドロミテに行くことにしました。

宍戸　元（医57）元気です。昨年は5月にブータン、8月にはモンゴル旅行に出かけました。どちらも自然の中で生きることの良さが感じられました。

西川　元夫（工57）人生まさにたそがれ期。静かな時間を楽しんでいます。今年は、まだ元気が残っているうちに少し前向きな楽しみ方にもトライしてみようと考えています。

辻川　真（経57）スキーは2年間休止。山にも登っていません。1時間前後の強い散歩を週2回ほど、花づくりはそこそこの毎日です。一度、三枝画伯を囲み、OUMCの絵心ある人々の集いを催したいと願っています。

坪井　和子（薬58）一昨年6月、南フランス、ピレネーの山麓より北へ向かってパリまで、小さな美しい村々を絵を描きながら半月ほどかかってバスで縦断しました。異常な暑さとの戦いでした。山は私にとって、だんだん登るものではなくなり、絵を描く対象になってしまいました。最近は、たまのゴルフが唯一の脚のトレーニングです。

野田憲一郎（経60）外国人観光客のガイドを始めたところ、今年（2007年）は富士山に少なくとも3回登ることになりました。事故のないことが大切と、十分気をつけたいと思います。副会長も長く務めさせて頂いていますが、そろそろ老人は

リタイアする時期かと考えています。

広瀬　貞雄（工61）70歳を過ぎ、残り時間も少なくなってきましたので、これからは色々な会合に出席して、皆様のお話をよく聴き、体が動く間にあちこちに出かけることに致しました。JACの年次晩餐会にも出てみました。その翌日の懇親ハイクも楽しみましたが、考えていたイメージとは随分異なりました。JAC関西支部の集まりにも出てみるつもりです。九州の祖母傾連峰に登りたいと機会をうかがっています。

白井　達郎（工62）会社生活卒業後に始めた技術コンサル業は続けていますが、心臓に問題があり、階段では、もっぱらエレベータを利用、日々の散歩を心がける情けなき状況です。

田村　俊秀（医63）喜界ヶ島病院に勤めています。奄美大島東方の僻地離島ですが、人情素朴、暖かで、光と花に満ち、太平洋に日が昇り、日が暮れるのを病室から眺める暮らしです。

梶本　孝治（工63）一昨年来、循環器系の病気で体調を崩していましたが、7割がた回復し、黒部川ならぬ三途の川を渡渉せず、やれやれといったところです。そろそろ我が家の裏庭、六甲の散歩も始めたいと思っています。私にとって残されたのは、青春の墓標である六甲山系の岩場の墓守の仕事。これを残してくたばることはできません。山岳会の先輩方も鬼籍に移られた方々も多く、さみしくなりましたが、何とか若い人たちに阪大山岳会の伝統を伝える語り部の役割を果たしたいと思っています。

三沢日出夫（工63）元気で動き回っていますが、4月に食道がんが見つかりました。内視鏡で切除できたが、断酒しています（カラコルム以来のことか?）。また、右手親・人差し指が麻痺して箸・筆が使えません（「正中神経麻痺」との診断）。書類はすべて98ノートを引張り出して使用。この返信もそうです。

大川　和秋（工64）昨年6月末から3カ月間、ドイツに滞在しました。ドイツでも高齢化、若者の活字離れなど、日本と共通した問題を多く抱えています。また、外国人の進出、とくに中国人のヨーロッパへの進出には嫌悪感が抱かれています。日本と隣国のニュースはあまり入りませんが、パレスチナ、イスラエルなどの問題はやはり扱いが大きいです。地方がそれぞれの文化を誇るところが日本よりも強く、そのあたりに家族関係の伝統はかなり生き続けている理由もあるように思います。様々な付き合いを試みながら、挑戦できる分野を広げ、交流の場を作っていく下地作りに頑張っています。

吉川　信也（理65）幸い、健康に恵まれ、まだ現職で働かせてもらっています。山は眺めるだけになって久しくなりましたが、いろいろの山行の思い出は鮮烈に残っています。

畑中　薫（医69）週4日、阪急、JRを乗り継ぎ、道場の岩場を眺めながら片道2時間かけて三田駅へ。奥にある有馬高原病院という精神病院で入院・外来両方の診察をしています。精神科の専門医が退職したため、不慣れな私が経営者から頼まれて引き受けた次第です。うつ病や自閉症の患者を元気づける一方、統合失調症の患者を更生させる業務で、やりがいを感じています。

上松　一雄（工75）菱友システム技術という会社に移って2年目。最近は時間の余裕もでき、夫婦で旅行を楽しんでいます。

明神　知（基礎工78）昨年4月より大阪・千里の勤務となり、6年間の東京単身赴任から戻っております。ただ、東京への出張も多く、今回も（新年会へは）欠席させていただきます。

畑　秀信（人84）5月にヨセミテへ行ってきました。昨年に続き2回目でしたが、また新鮮な感動を味わえました。残念ながら天気悪化のためエルキャピタンの完登はなりませんでしたが、まだまだ体力的には大丈夫なようです。

河野　美樹（医05）仕事が猛烈に忙しく、山へも空（パラグライダー）へも行けません。体重が6キロ増！今年はシェイプアップも図りながら、バランスのよい生活を取り戻せればよいなあ、と考えております。

渡辺　景子（基礎工05）学部を卒業してから体調を崩して、大学院生としてはあまり学校へ行けてなかったのですが、だんだん元気になってきたので、今年は少しずつ頑張っていきたいです。

追悼

越智　栄次郎氏（本会理事、会計担当）3月2日午後、奈良県吉野郡川上村大迫の屏風嵓でフリークライミング中、約15メートル転落し、頭を強打して死去。48歳。

1983年経済学部卒。現役時代から岩登りを得意とし、剱岳・剱尾根、丸山東壁、鹿島槍・荒沢奥壁などを登攀した。卒業後は竹中工務店に入り、経理部を経て、営業部で取引先企業を担当していた。自宅は兵庫県宝塚市。

努力の人、気配りの人

大石　真也

越智、久しぶりの再会が君のお通夜だなんて、こんなに若くして逝くなんて――。結婚した時、「冬山は死ぬから、やめた。ボルダリングは続ける」と言ったな。でも、君がやってたのはフリークライミングで、しかも、この年齢で難度が5・13のリードクライミング。今の私には想像すらできないレベルだが、昔と同じで、君は努力家で、向上心に満ちあふれていたんだね。

そう、昔から君は努力家だった。体格的には恵まれてなかったのに、練習で技を磨いていた。1年の時は同期の皆と大差はなかったようだけど、4年の時は断トツにうまくなっていた。そんな努力家だったから、仕事も、家庭も、山も、手を抜くことなく完璧にこなせたのだろうな。

でも、君は努力家によくある、ダメなやつを馬鹿にしたり、陰口をたたいたりすることは絶対になかった。周りの皆に気を配り、笑わせ、楽しませてくれた。同期のまとめ役で、叱咤激励、リードしてくれた。後輩の面倒も一番よく見てくれた。一昨年5月も、現役部員を剱に連れて行ってくれた。お通夜の弔問客の多さにびっくりしたけど、これも君の人徳を物語っている。

ほんとうに、惜しい。きっと、あと10年あれば、すごいことを成し遂げられただろうに。ほんとうに、寂しい。もう一回、酒を酌み交わしたかった。「越智、天国で安らかに眠ってくれ」と言っても、君はまた何か目標を見つけてがんばっているのだろうな。

（1983年工学部卒）

年齢感じさせぬ大先輩

三十尾　誠

越智さんに初めて会ったのは、3年前、広島県の下帝釈峡の岩場に連れて行ってもらった時と記憶している。細身ながら年齢を感じさせず、若者より巧みに岩を登る姿と、仕事を持ちながらも高い能力を保たれていることに感銘を受けたものだ。

その後も何度か岩登りに同行してもらったほか、愛知県の鳳来という岩場に行った時には、南アルプスの光岳にも登ったし、沢登りにも行った。山を歩いても疲れを知らないかのごとく体力のある方で、私たちのほうがもたつくほどだった。そればかりか、今思えば数え切れないほどの迷惑をかけたが、呆れながらも穏やかに接してくださった。今となっては、ご恩返しもできなくなってしまったのが悔やまれてならない。

通夜、告別式には多くの友人が駆けつけられ、私も、関西を離れた先輩方と久しぶりにお会いして、思い出話などを聞くことができた。ご家族の無念は察するに余りあるが、気丈に振る舞われていたのが印象的だった。思い起こせば、車で遠くの山へ出かける際、息子さんを同伴されることがあった。現地では別行動だったようだが、越智さんなりに家族に精いっぱい気を遣っておられたのだろう。

足腰の鍛錬も欠かされなかったと聞くが、越智さんの生涯はあたかも鍛え抜いた足腰でハーフマラソンを駆け抜けるかのようであったとも思う。フルマラソンの人たちよりも短い人生ではあったが、常に手を抜くことなく、颯爽としていた。今は、ご冥福を心から祈るばかりだ。

（山岳部員、理学部4年）

久保　三朗氏（本会評議員、日本山岳会関西支部幹事）5月11日、食道がんのため死去、80歳。1952年工学部機械学科卒。草創期からの会員で、現役時代は厳冬期白馬岳主稜登攀などに参加された。卒業後は住友金属工業に入り、日本山岳会関西支部では山行委員として活躍された。自宅は兵庫県芦屋市。

「地道な山登り」貫く

田島　汎

久保さんは昨年夏、脳梗塞を発症されたが、すぐに回復し、会合などに出席されていた。日本山岳会関西支部の新年会でも同じテーブルにつき、一緒に芦屋まで帰ったりしていたから、突然の訃報に絶句した。

久保さんと私は同じ昭和24年に入学したが、久保さんは旧制で4月に入学。私は新制で6月入学、新学期は9月からだった。それでも入学早々、山岳部に入り、日本山岳会のルームで開かれた集会で初めて会ったのである。小柄でおとなしい感じが最初の印象で、それでいて芯はしっかりしているとお見受けした。

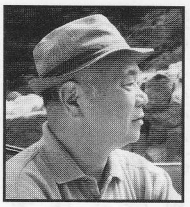
事実、その通りで、久保さんの山登りは「地道に」という言葉そのもの。いたずらに、より高き、より険しきを求めるのではなく、低い山でも無名の峰でも、その存在をしっかり見つめ、一歩一歩踏みしめてといった登り方であった。こうした姿勢は一貫しており、雪や氷や岩のテクニックは身につけても、それらを使う前提として山の中での生活に重点を置いていた。山登りというスポーツは24時間すべてが対象で、テントや雪洞での生活、それに夜寝ている間もプレー中なのである。

久保さんは、みんなが忘れがちな、こんなことに細やかな配慮をする人だった。我々が現役から若手OBだった頃は交通も不便で、山登りが始まるまでに半日から一日は重い荷物を背負って歩くのが当たり前。たいていは途中で一泊せねばならなかった。こんな時、特に冬季は建物があるのとないのとでは大違いだが、幸い、当時も各種工事用の小屋が道端にあった。久保さんはこんな小屋の構造を熟知しており、どこかの羽目板を外すか、窓を開けるかして中に入れてくれた。翌朝はきちんと掃除と戸締りをし、サヨナラする。無断使用ではあるが、許される範囲で、随分教えられたものだ。

もう一つは卒業後に勤めた会社まで同じだったことだ。勤務地は違ったが、どちらも大阪地区だったから、時々、連絡し合って岩登りやスキーに出かけた。中でも、ある年の正月に少しレベルの高い山をと、山本(光)君と由比浜君を誘って飛騨側から槍ケ岳をめざした。当時、この時期にこのルートから入る人はなく、トレースもなく苦労したが、天候に恵まれて頂上に立つことができた。ビバークの夜や槍平小屋での生活などで、またまた久保さんの片鱗に触れ、いろいろ教えられたことが今も懐かしく思い出される。

久保さんは、もう三途の川を渡り、持ち前の着実な足取りで冥土に向かって歩いておられることだろう。向こうでは、徳永、尾藤、坪井らが待っている。我々もいい加減の年になった。長くないうちに後を追うことになる。久保さん、その時まで、御機嫌よう、さようなら。

(1952年経済学部卒)



山本　進一郎氏　2月23日、心筋梗塞のため死去、74歳。1956年理学部物理学科卒。現役時代は黒部川下ノ廊下横断計画などに活躍。卒業後は日本電気(NEC)に入り、中途退社して山本真空研究所を創業された。自宅は東京都町田市。

「ダッシュ」を偲んで

関本　靖裕

われわれ山岳部仲間では山本君のことを「ダッシュ」と呼んでいた。この愛称は彼のボッカの勇姿から生まれたものだった。がっしりした体格で、合宿では文句一つなしに平均以上の荷物を担いで、のっしのっしと歩き、率先して事に当たった。常にダッシュ。ラグビーで言えばスクラムフォワードであった。その男性的イメージとは異なり、非常に細やかな神経も持ち合わせていた。岩登りでは、慎重かつ身軽に登攀し、常に安心感を与えてくれた。

彼とは理学部物理学科の同窓であった。教養時代、彼は北校、私は南校だったので、彼を知ったのは部活においてであった。3年生の秋(1955年)、ダッシュと私、先輩女子部員の3人で晩秋の立山を越え、黒部川を下った。室堂で新雪に覆われた立山を望み、一ノ越から一気に黒部源流へ。晩秋の下ノ廊下の紅葉はすばらしかったが、狭い吊り板の上をキスリングが岩に触れないよう蟹の横ばい歩きで、景色どころではなかった。翌朝、仙人谷の関電小屋から見た黒部は白一色。この山行きは今でも楽しい思い出となっている。

理学部では2年間、一緒に学んだ。学課の中に真空技術の実験のため、拡散ポンプをガラス細工で製作する課題があり、彼は、不器用に見える大きな手で上手にポンプの部品を作っていくので、一同感心したものだった。後に真空技術のコンサルタントと装置の製作を業とした。事業も粘りでやり遂げ、やがて御子息が仕事を引き継がれた。

2005年10月、物理学科の同窓会を韓国で開いた時の話である。出発の日、彼はパスポートを忘れ、奥さんに成田空港までタクシーで持ってきてもらい、やっと飛行機に間に合った。また、近年、軽い心筋梗塞で倒れたこともあり、奥さんから携帯電話を持たされていた。それにもかかわらず、この会では大いに酒を飲み、「物理数学の球関数を理解しないと、量子力学はマスター出来ない」と独演した。相変わらず豪快なダッシュだった。

訃報が届いた折、彼は、仲間と碁を打ち、帰宅して間もなく、「気分が優れない」と言って床に就き、そのまま逝ったことを知った。実に彼らしく、また幸せな旅立ちだったと思う。

(1956年理学部卒)

川島　勇氏　6月3日、肝臓がんのため死去、79歳。1954年工学部機械学科卒。現役時代は積雪期後立山逆縦走などに活躍。卒業後は住友石炭鉱業に入り、大阪支店長などを歴任された。自宅は千葉県佐倉市。

編集後記

今号は16ページ建ての盛り沢山な内容となりました。執筆者の推薦など、会員のみなさんのご協力のおかげです。原稿は何でもOKで、特に、若い方の寄稿を歓迎します。久保、川島両氏の訃報は締め切りを過ぎてからのことで、最小限のスペースしか割けませんでした。

(会報担当・高田邦雄)